慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	現代的な知覚研究のための哲学的基礎づけとその体系化
Sub Title	Philosophical grounding and systematization for the contemporary study of perception
Author	柏端, 達也(Kashiwabata, Tatsuya) 美濃, 正(Mino, Tadashi) 篠原, 成彦(Shinohara, Naruhiko)
Publisher	
Publication year	2013
Jtitle	科学研究費補助金研究成果報告書 (2012.)
Abstract	以下のことを遂行することにおいて課題に関するいくつかの成果を得た。すなわち、(1)色彩の存在論における投影説的見解に対する評価。(2)聴覚対象および嗅覚対象の存在論に対する、出来事意味論の観点からの、また共同知覚の観点からの検討。(3)いわゆる「共同注意」に関する体系的な哲学的概念分析。(4)知覚対象と知覚経験に関する可能世界的意味論に基づく理論化可能性の検討と評価。(5)知覚に関する表象説(志向説)のさまざまなヴァージョンに対する理論的評価。
Notes	研究種目 : 基盤研究(C) 研究期間 : 2010 ~ 2012 課題番号 : 22520012 研究分野 : 人文学 科研費の分科・細目 : 哲学・哲学・倫理学
Genre	Research Paper
URL	http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KAKEN_22520012seika

様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年５月１５日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５２００１２
研究課題名（和文）： 現代的な知覚研究のための哲学的基礎づけとその体系化
研究課題名（英文）： Philosophical Grounding and Systematization for the Contemporary Study of Perception
研究代表者：
柏端　達也（KASHIWABATA　TATSUYA）
慶應義塾大学・文学部・教授
研究者番号：80263193

研究成果の概要（和文）：
以下のことを遂行することにおいて課題に関するいくつかの成果を得た。すなわち、(1)色彩の存在論における投影説的見解に対する評価。(2)聴覚対象および嗅覚対象の存在論に対する、出来事意味論の観点からの、また共同知覚の観点からの検討。(3)いわゆる「共同注意」に関する体系的な哲学的概念分析。(4)知覚対象と知覚経験に関する可能世界的意味論に基づく理論化可能性の検討と評価。(5)知覚に関する表象説（志向説）のさまざまなヴァージョンに対する理論的評価。

研究成果の概要（英文）：
We have obtained results relevant to our subject in carrying out the following tasks: (1) assessment of projectivist views in the metaphysics of color; (2) investigation of the ontology of auditory and olfactory objects, from the perspective of event semantics, and from the perspective of joint perception; (3) systematic philosophical analysis of the concept of "joint attention;" (4) examination and evaluation of possibility of a theory of perceptual objects and experiences based on the possible-worlds semantics; and (5) theoretical evaluation of versions of "representationalism" (or "intentionalism") about perception.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
2012 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・哲学・倫理学
キーワード：知覚の哲学

１．研究開始当初の背景

「知覚の哲学（philosophy of perception）」は、「認識論」と「心の哲学」の双領域にまたがる分野である。感覚や知覚からいかに知識が得られるかといった問いは、古くからある認識論の問題であり、知覚の構成要素が知

覚者の心をどう構成しうるのかといった問いは、心の哲学における伝統的な問いである。20 世紀には、志向性、内包性、命題的態度などの概念との関わりで、言語哲学の領域でも知覚の問題が注目されるようになった。また生理学や神経科学、心理学、さらには工学等との関わりはいっそう明確になっている。知覚の問題に関して経験諸科学が与える知見を、今日では哲学者も無視することができない。他方で近年顕著なのが、分析哲学や記号論理学と融合した新しいタイプの形而上学（分析形而上学）と知覚の哲学との関係である。新しい形而上学的アプローチは、知覚の直接対象の問題や幻覚の問題、クオリアの問題などに対し、あらたな切り口を与えている。

このように知覚の哲学は、さまざまな専門領域を巻き込みつつ変移する現在進行中の分野である。ところが、まさにそうした特徴が「知覚の哲学」の全体像を捉えにくいものにしてきたのも事実であり、その状況は国内外においてあまり変わらない。個別のテーマの研究の深化は見られるものの、知覚の哲学は、全体像としては依然断片的であり体系化には遠い状態にある。――以上のような背景認識のもとで本研究は開始された。

２．研究の目的

前項に述べたように実際に多岐にわたる現代の知覚研究を、「知覚の哲学」の理論という観点から総合的・体系的に捉えるための枠組みの構築が、本研究プロジェクトの最終目標である。あるいはすくなくとも、今回のプロジェクトでは、その最終目標に向けての足がかりとなるような具体的課題の検討とあらたな観点の提起をめざす。またさらに、それをふまえ、経験科学をも含めた関連諸分野への理論的寄与の可能性を探る。

具体的には、以下の四つの側面に重心を置き、理論の構築を試みる。

（１）知覚のさまざまなモダリティの包括的な説明。これまで知覚の哲学は話題が視覚に偏りがちであった。痛みについては比較的独立した議論の伝統が存在するが、その場合でも痛覚に関する議論と視覚に関する議論とのあいだの体系的関連性はそうあきらかではない。知覚のモダリティの多様性については紀元前から指摘されており（アリストテレスの視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚）、ほかに痛覚、圧覚、位置覚、運動覚などをも数え上げるなら、知覚に関連して説明すべき事柄の範囲は非常に広い。しかも、説明すべき正確な範囲について意見の一致があるわけではない。われわれはまず説明対象の外延を確定することから始めなければならない。さらに、各モダリティの独立性に関しても問題がある。以上はすべて未解明の哲学的問題である。本研究では、知覚のさまざまなモダリティを偏りなく適切に捉えるための見取り図を提示する。

（２）知覚の哲学における共通の“問題”あるいは“概念”の抽出。たとえば知覚に対する知識の「基礎づけ」という伝統的な問題が今日どれだけ共通のテーマたりうるかは、哲学者たちのあいだで大きく意見が分かれるだろう。また、知覚の議論において今日キーコンセプトの一つになっている「表象」の概念は、正確に何を意味するのかがいまだまったく明確でないと言える。本研究では、知覚の哲学に関連する基本的な問題や概念の明確化が、主たる目的の一つとなる。

（３）形而上学的な問題群との関わりの解明。たとえば、知覚の直接対象が何であるかという問題は、「世界」がどのようなカテゴリーの存在者によって構成されていると考えるべきかという、明白に形而上学的な問題を含んでいる。この点は未解明の新しい問題領域を形成しうる。知覚の直接対象の存在論や、色や音の存在論、あるいは性質論一般といった現代の形而上学の議論と、知覚の哲学との適切な接続を、本研究はめざす。

（４）自然科学の知見がもつ含意の正確な把握と評価、そしてその反映と応用可能性の検討。生理学や神経科学、発達心理学、あるいは認知ロボティクスといった工学関連分野等において、知覚の問題に関係する多くの成果が上がっていることはまちがいない。だがそれらの成果が、知覚についてのわれわれの一般的理解や理論にとってどのような含意をもつのかは、まだ十分あきらかにされていない。本研究では、進行中の他の共同研究における経験を基にして、自然科学の知見がも

つ含意を正確に把握し、それらを哲学的理論へと反映させることに努め、さらにその理論の応用可能性についても検討する。

３．研究の方法

本研究は、研究代表者（柏端達也）および分担者（美濃正、篠原成彦）という核となる３名に研究協力者の３名を加えた実質６人の体制で遂行される。相互連携のしやすい小規模な研究組織であるが、研究分野の専門性に応じて組織はさらに三つの部門へと分けられる。すなわち、(1) 心の哲学、(2) 認識論・言語哲学、(3) 形而上学の三部門である。

三つの部門は、参加メンバーの専門性を反映している。（すなわち「心の哲学」は美濃正と研究協力者の小草泰、「認識論・言語哲学」は篠原成彦と研究協力者の藤川直也、「形而上学」は柏端達也と研究協力者の前田高弘により構成される。なお、研究協力者の前田と段階的に入れ替わるかたちで、平成 23 年度途中から京都大学の海田大輔が協力者として加わった。）各メンバーは、自身が第一の専門とする個別部門での研究を遂行しつつ、本研究において重視される四つの側面（「研究の目的」欄を参照）を意識し、最終的には知覚の哲学の新しい総合的理論の構築をめざす。

各年度の進行計画は以下のとおりである。

平成 22 年度：各部門に比較的固有の既知の問題を整理・考察し、そこから、知覚の哲学という観点のもとで核となりうる議論が抽出できないかを検討する。すなわち、心の哲学の部門においては、とくに知覚経験の現象的性格、知覚と概念的思考、および直示的思考（直示的同定）をめぐる問題について検討を加える。また、認識論・言語哲学部門においては、知覚の選言説、および知覚経験と実在との関係をめぐる問題を中心に検討する。そして、形而上学の部門においては、知覚の対象および知覚そのものの存在論的な身分の問題、および知覚対象に対する直接性の概念に関わる問題の検討を行なう。

平成 23 年度：第二年度は、部門間の連携を密にし、前年度得られた知見に基づき、「知覚の哲学」という包括的な分野における重要な問題の検討と解明に取り組む。まず、心の哲学部門は認識論・言語哲学部門と連携し、知覚のモダリティの多様性に関し、認知的観点と言語的観点からの整理と統合を試みる。また、認識論・言語哲学部門は形而上学部門と連携し、知覚と実在あるいは「世界」との関係についての理論的な検討を中心に、研究を進める。そして、形而上学部門は心の哲学部門と連携し、クオリアの概念に関して、知覚の哲学という体系的観点から解明を行なう。さらに、研究代表者と研究分担者は、最終年度に向けてのロードマップを明確にする。

平成 24 年度：最終年度では、平成 23 年度までに明確化した具体的な研究プランに沿って、最終目標である総合的な知覚の哲学のための理論構築を行なう。

なお以上の年次計画と同時並行的に、経験諸科学との連携可能性を探る研究を、早い段階から全部門において行なう。

４．研究成果

成果を、先述の「研究の目的」欄の四つの項目との対応を明示するかたちでまとめると、以下のとおりである。

(1) 色彩論に関連して形而上学的意義をもつ複数の知見を得た。それらは主として、色の存在論における投影説的見解の評価に関わるものである。（これは「研究の目的」欄のおもに２と３の側面に関係する成果であり、後述の論文②、および発表⑦、⑧に対応する。）

(2) 聴覚対象および嗅覚対象の存在論をめぐって、二つの新たな観点から検討を加え、一定の結論を得た。二つの観点とは、一つは出来事意味論の観点、もう一つは共同知覚という観点である。（これは「研究の目的」欄の１と３の側面に関係し、後述の発表①、および研究協力者のいくつかの業績に対応する。）

(3) 関連して、発達心理学におけるいわゆる「共同注意」について、視覚以外のモダリティを包摂する文脈で、体系的かつ基礎的な哲学的概念分析を行なった。（これは「研究の目的」欄の１と２と４の側面に関係し、発

表①として部分的に公表した。）

(4)知覚対象の存在と知覚経験に関して、可能世界的意味論に基づく理論化の可能性を検討した。検討結果はそのままのかたちで発展させうるものではなかったが、たとえば曖昧対象の知覚の問題等に関して一定の観点を得ることができた。

(5)知覚の知覚に関する表象説（志向説）のさまざまなヴァージョンに対する理論的評価を行なった。理論的評価は、いわゆる知覚の「内容」をどのように捉えるべきか、現象的正確をどのように扱うべきか、選言説および直接実在論との対比、幻覚や錯覚にまつわる伝統的な問題との関係…といった複数の観点から、総合的に行なわれた。個々のいくつかの論点に関しては本研究参加メンバーのあいだで評価の違いがあるものの、全体としては、表象説（志向説）を批判的に取り込むかたちで統一的理論の雛形を提示することができ、そのいみで、「現代的な知覚研究のための哲学的基礎づけとその体系化」という当初の課題に対する一定の具体的な答えと副次的な知見を得ることができた。（この成果は本研究のすべての側面に関わるものであり、発表の④と⑤にその一部が対応している。）

本研究プロジェクトにおける上記研究成果を含む諸成果は、それぞれの年次ごとに段階的かつ暫定的に、とりわけ応用哲学会の年次大会（第三回、第四回、および第五回）において、研究代表者、研究分担者、研究協力者を中心メンバーとするワークショップのかたちで公表された。そこで得られた評価をふまえた研究は、当科学研究費補助金による研究期間が終了した現在も主要メンバー間で続行中であり、将来的に、より体系化された形態で、より広く公開することをめざす予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 柏端達也、一元論をめぐる現代の議論における若干の「カント的」な観念について、日本カント研究、査読無、第 13 号 2012、pp.37-51

② 篠原成彦、事物は色をもちうるか、哲学の探求（哲学若手研究者フォーラム編）、査読無、第 38 号、2011、pp.27-41

③ 篠原成彦、クリプケンシュタインのパラドクス再訪、哲学論文集（九州大学哲学会）、査読有、第 47 号、2011、pp.121-136

④ 柏端達也、継承と拡散――「形而上学」は再興するか、哲學（日本哲学会）、査読無、第 61 号、2010、pp.53-67

〔学会発表〕（計９件）

① 柏端達也、知覚の共同性と公共性について――‘joint attention’の話を中心に――、応用哲学会第五回年次研究大会、2013 年 4 月 20 日、南山大学

② 柏端達也、未来の態度と時間的な合理性、MIPS（三田哲学会）哲学・倫理学部門 2012 年次例会、2012 年 10 月 27 日、慶応義塾大学

③ 柏端達也、現代の分析的形而上学における若干の「カント的」概念について、日本カント協会第 36 回大会、2011 年 11 月 12 日、首都大学東京

④ 美濃正、知覚のいくつかの基本的性格について：直接性、現象的性格、透明性、応用哲学会第三回年次研究大会、2011 年 9 月 25 日、京都大学

⑤ 篠原成彦、前田・小草両氏の議論について：表象説、二要素説、分離主義、そして知覚対象の〈現前〉、応用哲学会第三回年次研究大会、2011 年 9 月 25 日、京都大学

⑥ 柏端達也、時間の非対称性と価値や幸福の問題、日本時間学会第 3 回、2011 年 6 月 11 日、山口大学

⑦ 篠原成彦、事物が色をもつとはどういうことか、九州大学哲学会平成 22 年度大会、2010 年 9 月 25 日、九州大学

⑧ 篠原成彦、色について、2010 年度哲学若手研究者フォーラム、2010 年 7 月 17 日、国立オリンピック記念青少年センター

⑨ 柏端達也、共同討議Ｉ：形而上学再考、日本哲学会第 69 回大会、2010 年 5 月 16

日、大分大学

〔図書〕（計 3 件）

① 美濃正，他、京都大学学術出版会、安孫子信・出口康夫・松田克進編『デカルトをめぐる論戦』、2013、348 頁（pp.209-227 を担当）

② 美濃正，他、大隅書店、戸田山和久・美濃正・出口康夫編『これが応用哲学だ！』、2012、312 頁（pp.37-45 を担当）

③ 柏端達也，他、世界思想社、戸田山和久・出口康夫編『応用哲学を学ぶ人のために』、2011、380 頁（pp.71-83 を担当）

６．研究組織

(1)研究代表者

柏端　達也（KASHIWABATA　TATSUYA）
慶應義塾大学・文学部・教授
研究者番号：80263193

(2)研究分担者

美濃　正（MINO　TADASHI）
大阪市立大学・文学研究科・教授
研究者番号：70181964

篠原　成彦（SHINOHARA　NARUHIKO）
信州大学・人文学部・准教授
研究者番号：60295459